

第2回「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の選評

選考委員長 佐藤勝彦

第2回「子母澤寛文学賞」並びに「愛猿記賞」では、短編小説部門91点、エッセイ部門55点、合計で146点の応募がありました。

男女比では、短編小説が男性64%、女性が36%。エッセイは、男性が55%、女性が45%と、どちらも男性の応募が多い結果となりました。

応募者の年齢構成としては、短編小説部門では18歳（女性）～85歳（男性）で、その平均は60歳。エッセイ部門では14歳（女性）～90歳（男性）で、その平均は61歳という幅広い年齢層からの応募を頂戴しました。

応募は、南は九州・宮崎市から、北は北海道・旭川市まで全国の各地域からありました。遠くブラジル・サンパウロからも作品が寄せられました。

応募作品の選考方法は、まず実行委員会によって4月中旬から7月中旬まで3カ月かけて下読みを実施しました。

下読みでは、全ての応募作品を丁寧に読み込みながら、選考委員会に推薦する作品を選出する視点として、次の点について留意しました。

- ①「子母澤寛文学賞」「愛猿記賞」の趣旨であるヒューマニズムに溢れる作品であるかどうか。
- ②明るい読後感があり、未来への期待が持てるほのぼのとした作品であるかどうか。
- ③小説は文章構成やストーリーの展開が巧みであり、人物の性格設定にすぐれ、生き生きと魅力的に描かれているかどうか。

④最後まで一気に読ませる面白さがあり、多くの人たちに読んでもらいたいと思わせる作品であるかどうか。

そして、下読み完了後の合議の結果、短編小説部門から6作品、エッセイ部門から5作品がそれぞれ選出され、選考委員会に推薦しました。

推薦作品のタイトルは次の通りです。

【短編小説部門】6作品（受付順）

「夏のおと」「弁当」「ちぎれ雲」「水芭蕉」「阿古屋琴責」

「アキノウナギツカミ」

【エッセイ部門】5作品（受付順）

「消しゴム、半分こ」「惜別」「私の父と座頭市」

「いのちの贈りもの」「青桐の葉—『愛猿記』を読んで」

上記の推薦作品を選考委員会に諮り、慎重な審査を経て、受賞作品が次のように決定をみました。

短編小説部門では、乾みやこ氏の「夏のおと」が大賞に選ばれ、近藤ゆみ子氏の「水芭蕉」が佳作に決まりました。

エッセイ部門では、小坂真奈美氏の「私の父と座頭市」が大賞に選ばれ、金泉三恵子氏の「いのちの贈りもの」が佳作に決まりました。

なお、金泉三恵子氏は前回のエッセイ部門でも佳作を受賞しています。

【短編小説部門の選評】

「子母澤寛文学賞」大賞

乾みやこ氏の「夏のおと」

「夏のおと」は、田舎の狭い町や村に多い日常の風景、人の暮らしを描いた作品です。

夏が嫌いだという主人公・絵実子の心理描写を、自然の映像と音で表現した巧みな書き出しで物語は始まります。人々が集まる場所をあまり得意としない絵実子は、夏の自然が醸し出す蝉の声や太陽が照り付ける空気感を心が波立つ騒音と表現している。この騒音が嫌いな絵実子は、村の寄り合いなど、人々が集まる場所での喧騒も嫌いな一方で、絵実子と姑サクとの会話の少なさによる静寂さへの不安、この喧騒と静寂が人間関係の複雑さを予感させている。この作品の良さの一つとして、音の描写が大変に巧みに使われています。

物語の途中で、世間で悪く噂されている久米のバアサンが古ぼけた軽トラックで乗り込んでくる。「カスカス、という息も絶え絶えのような音をたててようやく走る。なるほど、すべてをこき使う」――。

しかし、絵実子は皆が言うより久米のバアサンを嫌だとは思っていない。「なかなか見事なバアサンだ。あれだけ思ったことを口にできたらさぞ気持ちがいいだろう。言われたほうはたまったものではないが」と絵実子は自身の胸に問いかける。

絵実子と姑サクとのあいだでも、互いに思っていることを素直に話しができたならという葛藤というか願望が顔を出す。

ここでも、前述した映像と音の描写が、見事に絵実子の心理を描き、久米のバアサンを取り巻く喧騒と、姑サクと自分の静寂な関係とを対比させる構図で人間関係のリアリティを強く感じさせる。こうした文章構成は、なかなか巧みな筆運びといえます。

選考委員から次のように高い評価を得ています。

「構想力、展開力、物語性が大変良い」

「久米のバアさん、サクの二人は一寸性格設定が極端な気がするが、その分やり取りの面白さが際立っていた」

「リアリティを感じながら、テンポよく読ませていただきました。最後の、『あ、命中した』『ほんとにか？』のセリフ全体に重ための内容が、ここでフッと軽くなり、読後感がとても良かったです」

「嫁と姑を実に温かく描き、『人間』の優しさ、誠実さにしっかり筆が届いている」

「子母澤寛文学賞」佳作

近藤ゆみ子氏の「水芭蕉」

本作の舞台は、札幌と石狩（石狩川河口の「マクンベツ湿原」と厚田区の厚田漁港）で子母澤寛先生のゆかりの地でもあります。

季節的には春まだ早いマクンベツ湿原。ひっそりと水芭蕉が咲いている。石狩川河口の雄大な風景と静寂な自然の描写から物語を展開させ、最後に高齢者の明日への夢として、古民家カフェへ着地させた一連の物語は、高齢化社会という今日的テーマを扱った作品といえます。

高齢者の問題を扱った作品は、年々増加する傾向にあり、それだけに作品自体の独創性が問われます。近藤さんの作品は、複雑な家族関係や社会の生きづらさなど、ともすると暗く深刻になりがちなテーマを、主人公・雪子と伯母・薫とのさりげない会話を通し、優しさと労りが溢れる人間性の豊かさが、読み手の心に染み込んできます。非常に好感の持てる作品に仕上がっています。

物語は、まだ肌寒い4月下旬、初めて水芭蕉を見る雪子を、かつて一度見に

来ている伯母の薫が、「ほら、あそこに道ができているのよ。あの世の入口」と得意げに案内する。淋しいその場所を、28歳で離婚した雪子と一度も結婚したことの無い75歳の薫が静かに会話しながら進む。

伯母は「並んで歩くと足を踏み外しそうになるから気をつけて。でも一人だと、何となく脇が寂しく思えるのよ。ちょっと、人生に似ていない？」とつぶやく。

選考委員からも、次のように好評が寄せられています。

「作品にただよう湿度、照度の低い感じが良い。また、時折入る、主人公の一人語りも、アクセントになっている。そして、二人が同居を始め、未来に繋がっていく結末も良かった」

「地元の『要素』をうまく活かした。老女が魅力的に描かれている」

「薫と善雄（雪子の父）という複雑な姉弟関係が物語を深くしている。ありそうでない小説らしい設定だと思う」

【エッセイ部門の選評】

「愛猿記賞」大賞

小坂真奈美氏の「私の父と座頭市」

エッセイの書き出しです。

「我が家から一時間程車で走ると、石狩市の厚田に着く。小さな町だが、豊かな食文化と海に見える景観や小高い丘に建ち並ぶ家々が絵本のページを開いた様に可愛らしく毎年訪れている。新しく出来た道の駅もあり、町はどこも人で賑わっていた。道の駅の二階には厚田出身の名士の展示があり、歴史や人物の紹介を見ている時にふと足が止まった。作家子母澤寛

氏の作品『座頭市』を演じた時の勝新太郎氏の写真があり、懐かしい心持になった。」

ここから、座頭市と真奈美さんの父（自称、九州男児で武士の出）との風貌が重なり合います。

子母澤寛先生の出生の地・厚田「道の駅」から彼の作品「座頭市物語」（ふところ手帳）へと流れを作り、その「座頭市」と父とを重ねた娘の情愛溢れる良質な語りは大変に好感が持てるものです。

選考委員から次のように高い評価が寄せられています。

「正確な原作読解の先に父の映像を浮かび上げる手法が良い」

「子母澤寛の座頭市の原作は映画にはない素晴らしさがある。その点を書いてくれたのは大変に嬉しい」

「北海道の歴史と個人の歴史が、道の駅でふと目にした座頭市の写真を介して、つながった瞬間を感じました」

『座頭市』に自分の父親を重ねた情感あふれる。文章に冗長さが無い」

「愛猿記賞」佳作

金泉三恵子氏の「いのちの贈りもの」

エッセイの書き出しです。

「ここは、どこなのだろう。真っ暗闇の世界が広がっている。横たわっているようだ。何も見えない、聞こえない。手・足・体は付いているらしい。そっと、手を上げてみる。『痛い。痛い。痛い。』頭から足の先まで激痛が走った。『生きている。私は生きている。』」

「命とは？」「生きるとは？」「夫婦とは？」、そして、「生きている幸せとは？」。

体験者であり、かつ洗練された文章表現力の持ち主が、読み手の心を打つ。淡々とした文章表現が命について深く考えさせるエッセイです。

選考委員からも、次のように好評を得ています。

「乱れのない文体が臨場感を保証している好文」

「主人公にとって、命を賭けた出来事をサラッと描くことで、命の重みを感じた」

「いのち、生きるということを考えさせられた」

「的確で無駄のない文章。書きなれていらっしゃるのかな、と思いました」

「稀有な体験を淡々と描いた。前佳作を凌いでいる」

「『生きる』こと具体性と、夫の姿を通して他者の幸せの実現に貢献する尊さを教えてくれる」